

理学療法士にとって「バランス」とは、筋力や体力、関節可動域などとともに障害の状態を考えるうえでとても大切な視点である。しかし「バランス」は脳、小脳、前庭機能、筋骨格系などの障害の成因となる部位や、それらの障害により認められる症候で取りまとめられた複合的な概念で、ともすると曖昧にとらえられがちなものである。本特集では、理学療法の重要な目的の一つである実用的歩行、諸動作の獲得について、「バランス」という観点からみた効果的な理学療法のプログラム立案や実施上での留意点について解説していただいた。

■脳卒中患者におけるバランス障害と理学療法（澤田明彦論文）

利用可能な身体資源が制約されるとともに、姿勢戦略に混乱が生じているために起こるのが、脳卒中患者のバランス障害である。機能回復の過程で新たな姿勢戦略を構築する必要があるが、回復状況に応じた戦略と麻痺側・非麻痺側の機能分担が重要となる。

■パーキンソン病患者におけるバランス障害と理学療法（八谷瑞紀、他論文）

パーキンソン病患者のバランス障害は、不安定な立位および歩行を引き起こすため、転倒や骨折の原因となり得る。パーキンソン病患者に対してバランス能力を改善する理学療法を実施することは、安定した日常生活を送ってもらうためにも重要となる。本稿では、パーキンソン病患者のバランス障害の特徴について概説した。さらに、近年の知見から、パーキンソン病患者のバランス能力に対する評価の結果および意義、理学療法の効果について述べた。

■下肢関節症患者におけるバランス障害と理学療法（大島富雄論文）

下肢関節症は高齢者に多い疾患であり、ロコモティブシンドロームと同様に、加齢に伴う筋力低下、関節変形、バランス障害が複雑に絡み合った症状を呈する。なかでもバランス障害は転倒のリスクとなるため、関節機能面に加え理学療法の治療の重要な対象となる。バランストレーニングを行うにあたっては、評価に基づく原因の追究が重要で、実際のトレーニングには筋力強化や柔軟性の改善をベースに、種々の感覚を利用したフィードバックが有効と考える。

■高齢者におけるバランス障害と理学療法（大羽明美、他論文）

加齢に伴う機能の減衰によりバランス障害を生じ、転倒→骨折→廃用→ADL 障害に至る場合もある。高齢者にとって廃用症候群は重要な問題であり、転倒予防の観点からバランス障害をとらえ、プログラム等を提案した。移乗・移動・物を取る動作での転倒割合が高く、原因は入力系の問題のほか、筋力・可動域等出力系の問題が考えられる。高齢者は、リスクに配慮したうえで、バランス練習や筋力強化、可動域練習等の積極的な介入が必要である。

■前庭器官疾患におけるバランス障害と理学療法（杉原弘康論文）

前庭リハビリテーションはめまいやバランス障害に対して有効なアプローチ方法である。本稿では前庭器官とそれらの疾患に伴う前庭障害をバランスへの影響を中心に概説する。前庭リハビリテーションの基本としてその考え方や評価法、そして治療アプローチのいくつかを紹介する。またバランス・エクササイズ的具体例を示しつつ、実用的な歩行の獲得に配慮すべき点やリスク管理についても説明する。